

| | |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| 〈巻頭言〉上海の同窓生 …………… 1 | 第3回市民研究員定例研究会講演会 …………… 5 |
| 日中韓シンポジウム報告 …………… 2 | 第3回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会 … 6 |
| 北京大学国際関係学院・島根県立大学合同国際シンポジウムの開催 … 2 | 新任助手自己紹介 …………… 7 |
| 第19回日韓・日朝交流史研究会 …………… 3 | NEARセンター研究員の研究活動⑤ …………… 7 |
| 地域貢献プロジェクト「世代を超えて受け継ぐ西周の意義」… 4 | NEARセンター短信 …………… 8 |

上海の同窓生

NEARセンター長 井上 治

2009年の晩秋は、浜田市との共同研究プロジェクトによる調査のため同僚の坂部晶子研究員とともに上海に出張した。上海の有名デパートの地下食品売り場で、日本産食品を買い求める現地のみなさんにアンケートに応じてもらうのが目的であった。

わたしは、上海での調査はこれようやく二回目である。上海にかんしてはずぶの素人である。一度上海で調査した経験があるのだから、右も左もわからず何もできないというようなことはない。しかしまだまだ勝手のわからない所であり、中国語で100パーセント用事が足せるわけでもない上に、上海語はまったくわからないのである。はっきり言って積極的になれない。それでも上海に出かけたのは、浜田市との共同研究であるという責任感もあるし、同行してくれた仲間のおかげでもあるが、それにもまして心強かったのは、本学大学院北東アジア研究科博士後期課程を修了し、現在は上海外国語大学に勤める張紹鐸さんの存在である。張さんは、勤務の合間をぬって、前回のインタビュー調査に続いて今回のアンケート調査を手伝ってくれた。張さんの助けがなければ、調査は成功しなかっただろう。

本学大学院北東アジア研究科博士後期課程で学位を取得した方の何人かには、NEARセンターの客員研究員に就任してもらっている。もちろん張さんもそのひとりである。NEARセンターは、この客員研究員制度を活用して、とくに海外で活

躍する博士後期課程修了者と実質的關係を維持しているが、修士課程修了者との研究上の關係はなく、その必要性も感じていなかった。ただ、今回の上海調査を通じ、すこし考えが変わった。

張さんの声がけに応じ、本学大学院修士課程を修了して現在は上海で働いている賀志明さんと隋佳傑さんと久しぶりに再開した。旅行業務経験のある賀さんは、今回のわれわれの用向きを知った上で、中国人の目から見ても島根には観光地としての魅力があると思うと話した。賀さんは大学院入学以前は旧石見町での長期滞在の経験がある珍しい中国人であり、石見に関する知識は生半可なものではない。そのような賀さんの発言だけに、単なるお世辞以上のものを感じた。隋さんは上海のテレビ局で日本關係の番組製作に関わっている。報道關係者の目から見ると、島根はどのような魅力があるのか、隋さんならどのような中国向けの島根紹介番組を作るのだろうか。いろいろ聞いてみたいと思ったのだが、歓談の時間はあっという間に終わってしまった。

島根県立大学で学び、現在は海外で実務に携わっている同窓生の知識と経験は、われわれセンターの研究活動に有益であるとの確信を持ちつつある。研究者となって活躍している同窓生に加えて、実社会で活躍している同窓生をセンターのネットワークに加える仕組み作りや、北東アジア諸国の同窓生に興味を持ってもらえるような情報発信のあり方を検討する必要がある。

日中韓シンポジウム報告

2009年9月22日、韓国忠清北道大邱広域市の啓明大学で日中韓シンポジウムが開催される運びとなり、飯田泰三先生を団長として張忠仁先生、唐燕霞先生、魁生からなる島根県立大学訪韓団が組織され、学术交流を行ってまいりました。中国からは中国社会科学院、山東社会科学院のメンバーが集いました。韓国側は啓明大学の呂副学長をはじめとして中国センターに在籍する重鎮の先生方、そして先鋭の若手の方から意を尽くしたご配慮をいただきました。

私にとっては5年ぶりになる釜山金海国際空港に到着し、啓明大学の若手スタッフに出迎えていただきました。釜山はかつて昭和の時代、「釜山港へ帰れ」という歌謡曲で知られ、その後韓流ブーム前夜の2001年、韓国で当時史上最多の観客動員数を記録した「友へ」の舞台として、日本の韓国映画ファンに強い印象を残しました。現在の釜山は、高層住宅の開発が爆発的に進行中である海雲台から国際観光都市として新たな整備が進むウォーターフロントのあたりが代表的な釜山の「顔」といえるかもしれません。そこから車で2時間弱、古くからリンゴの名産地として知られ、現在は韓国第四の都市として発展した大邱に到着します。北東アジア開発研究科の学生の中には大邱出身者が複数いますので、私ども島根県立大学とはすでにご縁のある地域であるわけです。

啓明大学のキャンパスは緑があふれ、開学50周年の記念事業では書堂（朝鮮のエリート文官が切磋琢磨の勉強をした学校）を整備したり等、総合大学としての歴史と威風を感じさせてくれます。（日本でヒットした「花より男子」の韓国版の撮影も行われたそうです）そんな素晴らしいキャンパスで開催されたシンポジウムのテーマは「低炭素緑色成長」でした。経済成長を達成してきた日本、韓国、そして目下猛烈なスピードで発展を続ける中国の研究者が、それぞれの専門分野から環境・文化を考えようとするものです。テーマ部会「東北アジアの緑色成長戦略」では、張忠仁先生「中国における環境保全のための財政政策について」、

そしてテーマ部会「緑色成長と東北アジア文化」では唐燕霞先生「中国に進出した日系企業の労使関係」と魁生「社会福祉の東アジアモデル－福祉社会をつくる日韓の市民的連帯－」と、それぞれ報告が行われました。啓明大学のスタッフをはじめ、たくさんの学生諸氏がフロアを満席にして聴講し、日中韓の研究者相互の専門的な意見交換とならんで学生からの質疑等も行われ、終始活気あふれる学術セミナーでした。

シンポジウムの席を外したところでは、日本留学経験をお持ちの中国、韓国の先生方が話してくださった仙台や筑波での留學生活の思い出や、日本の文芸作品や映画のお話をうかがうことができました。中韓の学術のフロンティアにいらっしゃる先生方が、日本に対して深い愛着と関心を持ち合って下さっていることを実感いたしました。

（魁生由美子研究員）



北京大学国際関係学院・島根県立大学 合同国際シンポジウムの開催

11月3日に交流協定校である中国北京大学国際関係学院にて合同シンポジウム「持続可能な発展：中日比較」を開催した。北京大学、島根大学、及び本学の関係者が参加し、活発な議論が行われた。報告の概要は以下の通りである。

本シンポジウムでは、環境問題とその解決へ向

けた方向性としての持続可能な発展を中心に、日中比較の視点から、環境問題の現状や取組の方向性を検討し、さらに今後の課題を探ろうとした。

第一セッションでは、本学の沖村理史先生が「地球環境問題への対応と環境外交－地球温暖化対策を中心に」という題で報告され、北京大学の張海濱先生が「中国と国際気候変動交渉」という題で報告された。沖村先生は環境社会学で用いられている受益圏と受苦圏の議論から地球環境問題を位置づけ、国際関係論で議論されている絶対的利得と相対的利得の概念から環境外交のあり方を検討し、各国が他の国々との間の相対的利得よりも、低炭素型社会建設に投資し、気候変動によってもたらされる悪影響を回避することで得られる絶対的利得に、より関心を持つことが、国際合意を成立させる上で重要であるという結論をまとめた。張先生は中国が1990年ICCNに加入した後の立場の変化を明らかにし、今後中国は温室効果ガス排出量削減の義務を受け入れない立場を引き続き堅持すると同時に、柔軟に対応していく姿勢を示していくだろうと述べた。

第二セッションでは、島根大学の伊藤勝久先生が「中山間地域の資源管理と地域振興」という題で報告され、北京大学の査道炯先生が「資源問題と中国の持続可能な発展」という題で報告された。伊藤先生は高知県四万十川流域を事例に、都市・農村連携による環境保全と地域振興の経緯、それに対応する政策的変遷、及びその意義と課題について検討し、都市・農村の協働と連携により、地域資源の管理はかつての上からの統治（ガバメント）から下からの自治（ガバナンス）へと変わりつつあることを論じた。査先生はオバマ政権の新エネルギー重視の政策を明らかにした上で、アメリカの新エネルギー開発協力提言に中国はどうか対応すべきかを述べた。

第三セッションでは、北京大学の帰永濤先生が「G2論と中国の持続可能な発展における国際政治の要素」という題で報告され、本学の李暁東先生が「『人』の視点から見る環境と発展－田中正造と鉱毒問題の事例を通じて－」という題で報告された。帰先生はG2論に対する中国のポジティブとネガティブの両側面の反応を述べた上で、中国の平和的発展の条件を説明した。李先生は近代

日本の最大の社会問題といわれる「鉱毒問題」と田中正造の思想の例を通して、日本の歴史的教訓と経験から発展と環境問題との関係について考察した。急速な経済成長を遂げた中国は、発展と環境との矛盾に応えるために、経済を中心とする発展よりも「以人為本」を徹底させることが重要であると説いた。

最後の第四セッションでは、北京大学の丁闢先生が「中国経済の持続可能な発展」という題で報告され、島根大学の國井秀伸先生が「中海自然再生事業における研究者の役割」という題で報告された。丁先生は中国経済の持続可能な発展を維持するために、経済成長方式の転換、太陽光発電、風力発電産業の育成、人の発展、国際環境保護協力などを重視すべきであると述べた。國井先生は島根大学の「汽水域重点プロジェクト」－汽水域の自然・環境再生の研究拠点に向けたプロジェクト研究の成果、そしてこのプロジェクトが中海の自然を取り戻すための自然再生事業に果たした役割について紹介した。（唐燕霞研究員）



第19回 日韓・日朝交流史研究会

2009年10月29日（木）、第19回日韓・日朝交流史研究会を開催した。この度の研究会は、第2回竹島／独島研究会を含意し（「竹島／独島研究会」については前号を参照）、定例の研究会としては初めて本学を離れ、韓国大邱市に所在する啓明大学国際学研究所での開催とした。

収容人員280名の会場が啓明大学国際学部の学生や教職員、地元市民でほぼ満席状態となる中

で研究会は進行した。まず啓明大学校国際学研究所の洪珉杓所長の開会の辞に続き、同大学校の呂博東副総長が「いわゆる“独島／竹島問題”を二分法的な領有権の問題としてではなく、それを如何に越えて未来志向的な形で議論を成立させるかというアプローチは斬新であり、その点で認識を同じくする韓日の学者が集い研究を進めている会の第二回目の会合が本学で開催されることは光栄であります。多くの成果が生み出されることを期待しています」と祝辞を述べられた。次いで、日本側研究者を代表して井上治NEARセンター長が、また韓国側研究者を代表して李盛煥啓明大学校教授がそれぞれこの研究会の立ち上げの経緯と意義を交えつつあいさつを行った。

その後、第1回目の研究会の形式と同様に、全体を3つのセッションに分け、それぞれのセッションで2つの報告とディスカッションを交えた討論が行われた。以下は、そのプログラムである。

◎第1セッション：独島／竹島研究の新たな接近

- ・福原裕二「島根県総務課所蔵文書解題」
 - ・方光錫「近代日本の国境確定過程と独島」
- 討論者：丁英美、佐藤壮

◎第2セッション：国際関係学的観点から見た独島／竹島研究

- ・佐藤壮「領有権問題における不可分性」
 - ・朴昶建「新韓日漁業協定と独島／竹島問題の再照明」
- 討論者：文竣映、裴奎成

◎第3セッション：生活史的観点から見た独島／竹島研究

- ・森須和男「市民から見た鬱陵島と竹島／独島」
 - ・金秀姫「独島／竹島・鬱陵島開拓と日本人移住漁村」
- 討論者：金仙熙、金英根

紙幅の関係上、それぞれのセッションにおける個別の報告・討論の内容には触れられないが、第一にそれぞれの関心・立場・アプローチにより領有権問題に潜む排他性を乗り越えようとする観点が示されたこと、第二にこれまで等閑に付されがちであった竹島／独島に関わる対象・事象・問題を積極果敢に掘り下げようとする姿勢が見られたこと、そして第三に未だ荒削りながら研究期間内に俎上に乗せようとするそれぞれの実証研究の概

要が明らかにされたことの三点を成果として挙げておきたい。この竹島／独島研究会は、日韓・日朝交流史研究会の活動に並行して、その会のメンバーに加え、NEARセンター研究員の協力を仰ぎつつ、3か年の計画で研究を進めているプロジェクトである。その初年度としては2回の研究会を経て、着実な蓄積を重ねていると考えている。

(福原裕二研究員)



地域貢献プロジェクト 「世代を超えて受け継ぐ西周の意義」

島根県立大学西周研究会は2009年度の地域貢献プロジェクトのテーマとして「世代を超えて受け継ぐ西周の意義」というテーマを設定した。そこには二つの理由がある。第一に西周には繰り返し甦る、古くて新しい意義と、進取の研究によって深く掘り下げるべき未開拓の新境地が同時に存在するという学問的関心である。例を挙げれば前者には西が『百学連環』において、物質次元と精神的次元とを架橋する学問営為として脳科学を取り上げたことが挙げられる。これは、近年ではJ. P. シャンジューとP. リクルの対話『脳と心』(合田正人・三浦直希訳、みすず書房、2008年)など多くの脳科学書のテーマである脳科学と哲学との対話を先取りした関心であろう。しかし、これは故鈴木登教授や小泉仰教授などによって過去の本研究会・シンポジウムで検討されたトピックである。後者の例としては、蓮沼啓介教授などが指摘した、既刊行の西周全集に未収録の西の遺稿に重要な意義を読みとろうとする試みがある。

第二に、西の思想が一方で島根県石見部あるい

は津和野という場所に発する郷土性の濃いものであるという認識であり、同時に西が広く知識を世界に求め、ついには普遍的な知に達したという探求心に注目したことに他ならない。

したがって、これらに対応して本テーマの活動もまた二つの形をとった。学問的水準をさらに高めつつ、西の意義を次の世代に伝えるためにはどのような方法をとるかという課題を担ったと言える。

こうして本年のプロジェクトは、まず、西周に関する内外の学問的営為に広く眼を配り続け、その中で注目すべき業績を紹介、検討することを行った。11月津和野町で行ったシンポジウムでは、西の業績を幅広く評価し、その中に現代においても意義を失わないものが数多くあることを指摘した、小泉仰氏（慶応大学名誉教授）「時代と場所を越えて受け継ぐ西周の意義」と、全集に収録されずにいる稿本の中から西の思想を掘り取ろうとする蓮沼啓介氏（神戸大学大学院教授）の「西周稿本目録の資料価値」とを発表して頂いた。

西周の意義を後の世代に伝えるためには、教育・行政機関への働きかけが必要である。西周研究会では津和野町教育委員会や地元高等学校などの学校関係者と連携を深めつつ、活動の成果をシンポジウムで紹介して頂くことにした。同じく11月のシンポジウムで米本潔氏制作の原稿を発表した中井将胤氏（津和野町教育委員会）は「西周と津和野の文化行政について」と題して報告を行い、津和野における西周の史跡、西周の資料の編纂の歴史と保存状況を紹介し、今後は人材の確保と体制の整備、研究施設の整備が課題になることを指摘した。

地域の文化的リーダーを育成するべく働きかけ



を強めることが今後の西周研究会の課題でもあることを知らされたこの一年の活動であった。

（島根県立大学 西周研究会 村井洋）

第3回市民研究員 定例研究会講演会

2009年11月7日に第3回市民研究会定例研究会が開催された。今回は外部講師としてNPO緑化ネットワークの北浦善夫事務局長を招聘し、「中国での砂漠緑化活動紹介-NPOのささやかな活動紹介とそこから見えてくるもの-」と題した講演会を開催した。豊富な視聴覚資料をもとに、NPOによる砂漠緑化活動についてわかりやすく紹介するものであり、北東アジア地域における環境問題、社会的交流という点できわめて示唆に富む講演であった。以下では、報告内容を要約する。

報告の冒頭に、なぜ中国の砂漠なのかとの問いに対して、近いから、安全だから、関係が深いからなどの理由以上に、楽しいからという自己満足が最大の理由であると指摘された。活動の目的として、人間の諸活動によって壊された植生の復元、砂漠化土地に暮らす人々の自助努力を促す支援、地元住民に対する支援、NGOだけでなく一般市民も活動に積極的に参加できるようになることが挙げられた。

次に、ホルチン砂漠の概況および形成と拡大のメカニズムが紹介され、政府の対策では砂漠化の進行を止めきれない現状が示された。NPO緑化ネットワークは2000年1月に設立され、中国内蒙古自治区通遼市政府をカウンターパートに、通遼市南部内半径50km圏内の計15ヶ所を活動地としている。緑化面積は約1684ha、植樹本数は約399万本、ボランティアツアーの参加者は累計2500名である。

地元住民の参加について、住民は生活圏の環境改善や収入増の点で受益者でもあり、労働機会の提供・余剰労働力の吸収という意味で労働力としてみることもできる。また、活動の最終目標として地元住民の自発的・自立的な取り組みが挙げられ、その意味で緑化活動は自立のための環境整備とみることもできる点が指摘された。ただし、住

民の積極的な参加を促すには長期にわたる活動の継続が必要である。5年、8年と活動を継続することによって、当初の猜疑心あふれる表情から笑顔へ、さらに友人としてのつきあいへと住民の態度に変化がみられたとのことであった。

最後に、一般の日本人がボランティアとして緑化活動に参加する目的・意義として、環境問題の最前線の現場に立つこと（知る）、問題解決に関わること（行動する）、日常生活から環境を意識し、関わっていくこと（関わり続ける）、日本人がよその土地で汗することの意味を地元住民に考えてもらうこと（地元住民への刺激）が挙げられた。

講師が冒頭に述べたように、活動が成果を上げている大きな理由として、参加者が自己満足のために活動に参加しているという点が挙げられよう。この点はNPO活動を持続可能なものにするためにもっとも重要な点であるかもしれない。

質疑では、浜田市がこれまでおこなってきた活動との異同に関するコメントなどを中心に、活発な意見交換が行われた。参加者は市民研究員・NEAR研究員・大学院生あわせて32人であった。

（林裕明研究員）



第3回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会

2009年7月21日、第3回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会が開催された。今回は、佐藤壮講師が、日本国際政治学会の編集による『日本の国際政治学2／国境なき国際政治』（有斐閣、2009年）・『日本の国際政治学3／地域

からみた国際政治学』（有斐閣、2009年）を紹介しながら、「メインストリームへの挑戦－国境なき国際政治と地域研究：北東アジア研究への示唆－」と題する報告を行った。

まず、同講師は、国際政治学が北東アジア研究に如何なる示唆を与えるかという問題関心の下、国際政治学と地域研究のそれぞれの課題を整理し、北東アジア研究への議論の視角を提示する。つまり、国際政治学の今日的な論点として、グローバルイシューズに如何に対処し、その具体的対策として「ガバナンスの向上」「公共性の確保・複数の公共財間の競合」「アイデンティティの共有やその多様性の承認」といった論点をあげる一方、地域研究の課題として、グローバル化や地域主義への対応として「グローバルな地域研究」が求められていることを指摘し、北東アジア研究に向けた視角を提示する。

このような視角は、国際政治学のメインストリームとしてのリアリズムのアプローチとは異なるものとなる。たとえば、主要なアクターをみると国家ばかりでなく、国際組織・NGOなども加わることとなり、国家による秩序形成というよりはむしろ複数のアクターによる複数の地球公共財が如何にして成立するか否かが論点として浮上する。また、地域統合に目を向けるならば、国家主権ばかりでなく、主権委譲や補完性原理が問題化され、統合と分裂を契機とする境界の強化・再定義が論点となるであろう。

北東アジア地域は、主権国家が強い影響力を維持する一方、グローバル化も急速に進んでいる。その意味で、北東アジア地域を考察する際、その基底に流れている複雑な変化を読み解く新たな方法論が求められるようになった。そこに、国際政治学のメインストリームへの挑戦の一つとして、北東アジア研究が有する一つの意義があると言える。（江口伸吾研究員）

新任助手自己紹介

新井健一郎

Arai Kenichiro

北東アジア地域研究センター嘱託助手

(学長室・英語)

この6月から島根県立大学でお世話になっています。まだ着任してから4ヵ月ほどしか経っていないのですが、先生方や事務局の方々、学生および同僚の助手のみなさん、また仕事をとおして接する地域・学外の方々、いずれもとてもよくしてくださるおかげで、浜田での生活にももうずいぶんと馴染んできたところです。

島根県と浜田市をはじめて訪れたのは5月の末、面接に呼んでいただいた時のことでした。日本海に沿って走る列車の車窓から見える自然や人々の生活の様子、そして何にもまして海に臨んだキャンパスからの眺望に、とても新鮮な、如何とも形容しがたい感情を呼び起こされたのをよく覚えています。また、生活をはじめて数ヶ月を経た今でも一度呼び起こされたその感情はどこかに新鮮さを失わずにとどまっているようです。この感情がなにであるのか、その意味を捉えるまでにはまだもう少し時間がかかるのかもしれませんが。

着任前から今日まで変わらずに心をひかれ続けているもう一つのもの、それがほかならぬ北東アジア地域研究センターです。実際に足をはこぶ前に県立大学のホームページをはじめてのぞいてみたとき、まず目にとまったのはNEARセンターの存在でした。さほど規模の大きな大学ではないにもかかわらず北東アジア地域研究のひとつの拠点とでもいえるセンターがあり、活発に研究会などが催されて多くの成果をあげている——〈北東アジア〉の範疇に含まれる国は日本をのぞいてどこも訪れたことのない門外漢の私の目にも、このことがとても魅力的に映ったのでした。

センターの事務室に実際に席を与えて頂いてからは、センターの魅力を現場でひとつひとつ実感しながら勤務を、またそれ以上に勉強をさせていただいています。研究に重きをおき対象に内在し

て実直にそれぞれの仕事に取り組む先生方、そういった先生方と顔の見える関係で結ばれながらさまざまな分野で自らの関心を追求している大学院生のみなさん、そしてユニークなバックグラウンドと旺盛な向学心を持った市民研究員の方々——学問分野や研究テーマはそれぞれ異なるとはいえ、〈北東アジア〉の〈地域研究〉という旗の下でこういった人々が有機的につながって織りなしている研究のためのゆるやかなコミュニティがここにはあります。こういった空気のなかでいろいろな方から刺激を受けつつ自己省察を深めることができるのは真の僥倖であると感じています。

NEARセンターで経験させていただいていることがなにであるのか、その意味を捉えるまでにもまだもう少し時間がかかりそうです。いずれにせよ、こういった魅力に富んだセンターがスムーズに運営され、さらに魅力を増してゆくために、微力ではありますがお手伝いをさせていただくことができると嬉しく思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



NEARセンター研究員の 研究活動⑤

〈センター研究員の活動をリレー連載で紹介しています。今号は江口伸吾研究員にご執筆いただきました（編集部）〉

現代中国政治は、共産党による一党支配という統治構造を維持していることにその特徴があるが、それを支える社会構造の視点から見ると、様々な矛盾が生じている。その起点となっているのが、改革開放期において一貫して進められた市場経済化という政策指針である。つまり、改革開放

による市場経済の導入が現在における中国の急激な経済成長をもたらし、それが共産党に統治の正当性を付与する一方で、その過程でそれまでは国家に従属していた社会が自律性を向上させることにより、社会主義計画経済体制では共存関係が成立していた国家・社会関係に矛盾が生じたのである。換言すれば、1978年を一つの起点とする現代中国政治の動向は、社会主義計画経済体制下において矛盾なく成立していた党・国家主導の統治構造の中に、市場経済の導入の成功に伴う社会的なアクターの自律性の向上によって、自己撞着する側面を自ら拡大させたと言えるであろう。

このような国家と社会が協調・対立関係をもたらす状況の中であって、現代中国政治を観察する一つの有力な方法としてアクター分析があげられる。つまり、現代中国の政治を考察する際に、政治制度を市場経済化に伴う社会変動と関連させてその変化を観察し、とくに社会の興隆と共に自律化する市民・企業・コミュニティ組織・各種の社会団体等々の多元化するアクターを対象として、それらの活動の中で展開される国家と社会の相互影響の過程を考察することにより、政治制度の変化の方向性やその正当性の調達方法を考察するのである。

アクターの動向を考察する際、最も注目される領域の一つとして、中国の政治社会を末端から支える農村と都市の基層社会があげられる。たとえば、農村地域では、1980年代以降、市場経済化による農村工業化とそれに伴う流動人口の増加により、社会の再組織化が進み、強力な影響力を誇示してきた共産党支部に加えて、郷鎮企業・民営企業やその従業員（外来人口を含む）、農村住民といったアクターの多様化が進んだ。このように再組織化される農村社会の統治の正当性を高めるために、1990年代以降積極的に村民自治制度が導入されたのである。その結果、党支部による国家政策の浸透と企業・住民をアクターとする社会の利益の表出の二つのベクトルを調整・整合化するための制度の導入が進む。

また、近年、都市においても、アクターの多様化をめぐる問題が注目を集めるようになっていく。とくに、2000年以降、社区（コミュニティ）建設が進み、住民自治の在り方が問われるように

なっている。つまり、市場経済化により経済活動の民営化や外来人口の増加が都市部の流動化を促進し、住民の多様な利害関係を調整するための自治が模索されたのである。たとえば、従来の共産党支部、居民委員会に加えて、住宅の所有権等の権利意識に目覚めた業主委員会といった新たな組織も生まれ、これらのアクターの関係性の模索が続いている。

以上のように、現代中国政治は、一党支配の統治構造の中に多様なアクターを抱え込み、その関係性を再構築する課題に対峙している。この課題を解決する過程で問題となる政治的民主化がどのように扱われるのか、その動向を注視していかなくてはならない。（江口伸吾研究員）

NEARセンター短信

●本年の博士号取得者について

- 2009年2月20日に開催された「博士論文公開審査会」、及びその後の学位論文審査、研究科委員会の議決を経て、大学院北東アジア研究科博士後期課程の寺田哲志さんが、論文題目「持続可能な水資源利用と統合型水資源管理の有効性」で社会学博士の学位を取得されました。
- 2009年9月23日に開催された「博士論文公開審査会」、及びその後の学位論文審査、研究科委員会の議決を経て、大学院北東アジア研究科博士後期課程の趙曉紅さんが、論文題目「『満洲国』における医療・衛生事業の展開とその特徴」で社会学博士の学位を取得されました。また、10月からは、中国の浙江大学歴史学部専任講師として活躍しています。

NEAR News 第34号

2009年12月発行

【編集発行】

島根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail: near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ: <http://www.u-shimane.ac.jp/36near/>